

茨城県教育財団文化財調査報告第219集

石井遺跡群

一般国道355号バイパス新設工事地内
埋蔵文化財調査報告書

平成16年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第219集

いし い い せき ぐん
石 井 遺 跡 群

一般国道355号バイパス新設工事地内
埋蔵文化財調査報告書

平成16年3月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県水戸土木事務所は平成2年度から千葉県佐倉市と笠間市を結び、本県中央部の幹線道路網を形成する一般国道355号の改築事業を行っております。この事業は、幅員が狭いうえ屈曲部分が多く、通行に支障をきたしがちな笠間市内の交通の円滑化を図るとともに、北関東自動車道からの周辺地域へのアクセス機能を図ることが目的であります。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所より事業予定地内に所在する石井遺跡群の発掘調査についての委託を受け、平成14年9月から発掘調査を実施しました。

本書は、石井遺跡群の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、笠間市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 齋藤佳郎

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成14年度に発掘調査を実施した、茨城県笠間市大字石井字御手洗307番地の2ほかに所在する石井遺跡群いし いせきぐんの発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。
調 査 平成14年9月1日～9月30日
整 理 平成15年8月1日～8月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久のもと、調査第一課第1班長鯉淵和彦、主任調査員荒蒔克一郎、調査員鹿島直樹が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、調査員鹿島直樹が担当した。

凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = +42,320\text{m}$ 、 $Y = +36,700\text{m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なおこの原点は、日本測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40m 四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10等分し、4m 四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C……, 西から東へ 1, 2, 3……とし、「A 1 区」, 「B 2 区」のように呼称した。さらに大調査区内の小調査区は、北から南へ a, b, c……j, 西から東へ 1, 2, 3……0 とし、名称は大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」, 「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の覧には、世界測地系に基づく緯度・経度を () を付して併記した。

3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 住居跡 - S I

遺物 拓本記録土器 - TP 土製品 - DP 石器 - Q 鉄滓 - M 瓦 - T

4 遺構・遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

 火床部  黑色処理

● 土器 △ 金属製品・鉄滓 ----- 硬化面

5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社) を使用した。

6 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

7 遺構・遺物実測図及び遺物観察表等の作成方法と掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は200分の1、遺構は原則的に60分の1に縮尺して掲載したが、調査区設定図はその限りではない。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺にしたが、種類や大きさにより異なる場合もある。

(3) 「主軸」は、竈を持つ堅穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

(4) 遺物の計測値の単位はcm、gで、現存値は()で、推定値は[]を付して示した。

(5) 遺物観察表の備考の欄は、残存率及びその他必要と思われる事項を記した。

(6) 遺物番号については、挿図、観察表、写真図版それぞれの番号を同一とした。

抄 録

ふりがな	いしいせきぐん							
書名	石井遺跡群							
副書名	一般国道355号バイパス新設工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第219集							
編著者名	鹿島直樹							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
いしいせきぐん 石井遺跡群	いばらきけんかさまし おおあざいしい 茨城県笠間市大字石井 あざみたらい ほんち 字御手洗307番地の2 ほか	08114 097	36度 22分 49秒 (36度 23分 00秒)	140度 14分 34秒 (140度 14分 22秒)	45) 48m	20020901) 20020930	1,054㎡	一般国道355号バイパス新設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
石井遺跡群	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡 1軒	土師器(坏), 須恵器(坏・高台付坏・盤・蓋・高盤・円面硯), 土製品(支脚)				
	その他	奈良時代	遺物集中地点1か所	土師器(坏・皿・甕・小型甕・手捏土器・ミニチュア土器), 須恵器(坏・蓋・甕・大甕・円面硯)				

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 奈良時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	10
(2) 遺物集中地点跡	12
2 遺構外出土遺物	16
第4節 まとめ	19
写真図版	

第1章 調査経緯



第1節 調査に至る経緯

平成14年5月24日、茨城県水戸土木事務所は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道355号バイパス新設工事地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、同年5月28日に現地踏査を行い、6月3・4日に試掘調査を実施した。平成14年6月6日、茨城県教育委員会教育長は茨城県水戸土木事務所あてに、事業地内に石井遺跡群が所在する旨回答した。

茨城県水戸土木事務所は、平成14年6月17日に茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、同年6月27日、茨城県水戸土木事務所あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

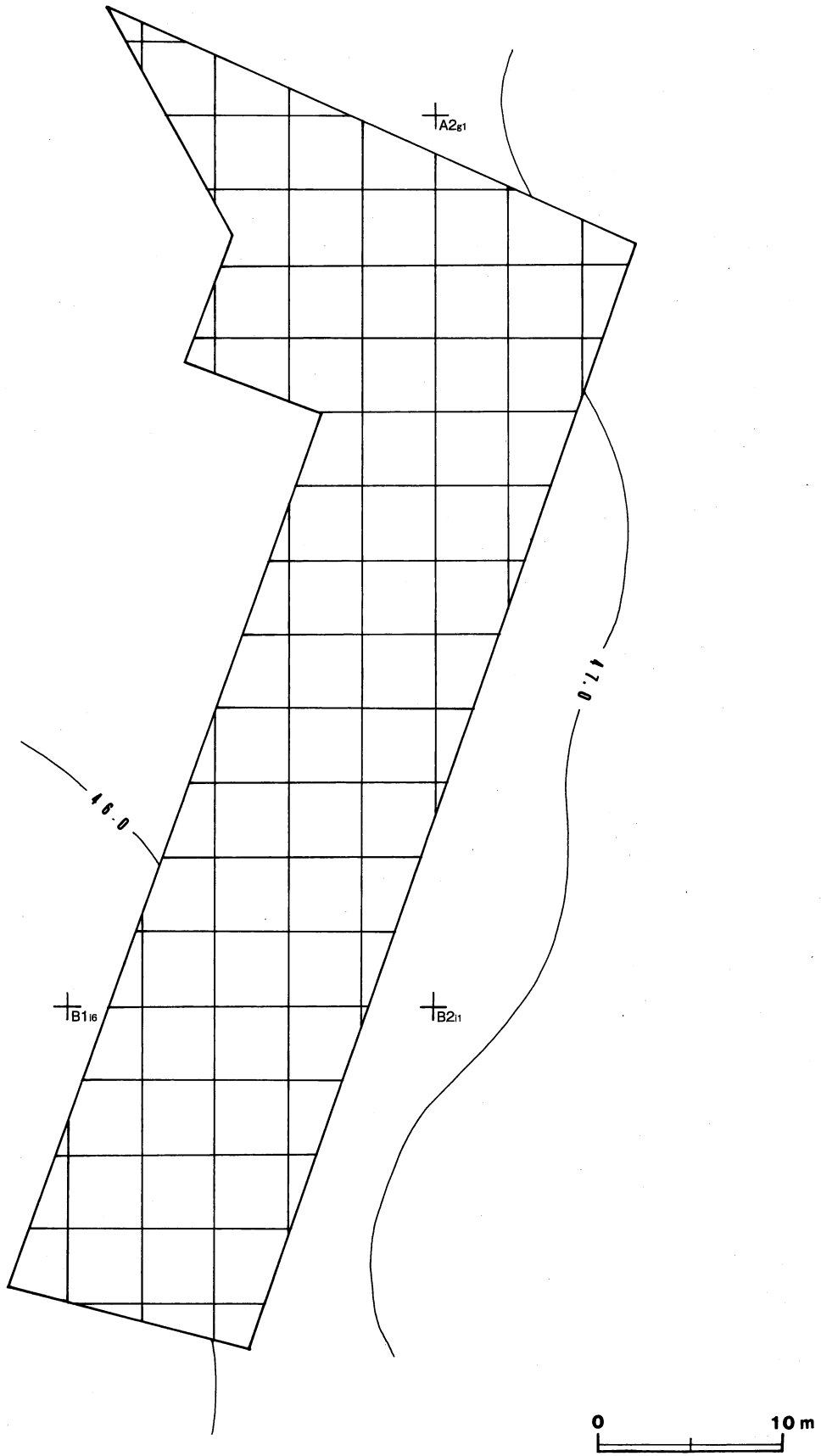
平成14年7月15日、茨城県水戸土木事務所は茨城県教育委員会教育長に対して一般国道355号バイパス新設工事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。7月17日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所あてに発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財発掘調査事業の委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

石井遺跡群の調査は、平成14年9月1日から平成14年9月30日までの1か月間実施した。

作業項目	9月			
調査準備 表土除去 遺構確認	■			
遺構調査	■	■	■	
遺物洗浄 注記作業 写真整理			■	■
補足調査 及び 撤収準備				■



第1図 石井遺跡群調査区認定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

石井遺跡群は、茨城県の北西部笠間市中央部の笠間市大字石井字御手洗307番地の2ほかに所在している。

笠間市の地形は、北部から西部にかけて八溝山系鶏足山塊の一部である国見山・仏頂山・欽柄山・棟峰などの山々が市街地を取り囲むように連なって、盆地を形成している。この鶏足山塊は古生代の砂岩や頁岩、粘板岩、チャート、石灰岩を含んだ地層が基礎となり、そこに白亜紀や第三紀の花崗岩が入り込み、周辺の堆積岩が熱変成を受けてホルンフェルスが形成されている。その上に関東ローム層が重なり、さらにその上には表土が堆積している。また、北側の七会村の山地から流れ出る涸沼川が、盆地のほぼ中央を南流し、飯田川・片庭川・稲田川を併せて涸沼に注いでいる。

石井地区は、栃木県仏頂山の東南麓から市内中央に伸びた箱田丘陵の舌状台地上に位置し、当遺跡群は涸沼川右岸の標高42～69mの石井台と呼ばれる台地上に立地する広範囲の遺跡群である¹⁾。

今回の調査地区は、稲田川と枝垂川が合流する地点の北東岸台地縁辺部の標高47mほどの緩斜面に立地し、調査前の状況は畑地であった。

第2節 歴史的環境

当遺跡の所在する笠間市石井地区の「笠間」という地名は『常陸国風土記』新治郡の条に「郡より以東五十里笠間村在り」として取り上げられている「笠間村」からきている²⁾。この「笠間村」は、昭和46年の国道50号線バイパスの建設工事に伴って国土館大学考古学研究室が調査した石井台遺跡を含む地域一帯がこれに当たるとされ³⁾、「石井」という地名も日本書紀に出てくる伝説から生まれたという。この伝説によって石井神社が周辺集落の民衆によって建てられるが、この神社は大同2年(807)創建と伝えられている。このように石井地区は古くから生活環境に優れていたと考えられ、現在に至るまで多くの人々が生活を営んでいる。ここでは当遺跡の所在する石井地区を中心に、周辺の主な遺跡について、時代を追って述べる。

当遺跡周辺では旧石器時代の人間活動の痕跡を残すものは確認されていないが、笠間市内では、南西部本戸地区の石崎遺跡〈1〉・本戸城跡〈2〉からそれぞれ細石刃が発見されている⁴⁾。また、平成14年度に当財団で調査された上加賀田地区に所在する小組遺跡〈3〉からは石器製作場跡が見つかり、2000点を超す剥片が出土して注目されている。

縄文時代では、早期から晩期の遺跡が約70か所確認されている。主な遺跡としては西田遺跡〈4〉・向山遺跡〈5〉などがあるが、これらは発掘調査が行われていないために、その全貌は明らかでない。

弥生時代の遺跡はほかの時代と比べると少なく、中期後半と考えられる本戸地区の蔵後遺跡〈6〉などもあるが、後期後半の遺跡が大半を占め、当遺跡群のほか薬師台遺跡〈7〉・峯崎遺跡〈8〉、金井地区の後久保遺跡〈9〉が挙げられる。特に、古墳時代前期の集落跡と重複する遺跡が多く、石井遺跡群や周辺の薬師台遺跡・十二所遺跡〈10〉・上坪遺跡〈11〉などでも確認されている。

古墳時代の遺跡は散布地11か所、古墳群が16か所の合計27遺跡が確認されている。前期の遺跡としては当遺跡群をはじめとして、薬師台遺跡・榎畑遺跡〈12〉・十二所遺跡などがあり、中期は十二所遺跡や当遺跡群、



第2図 石井遺跡群周辺遺跡分布図

表1 石井遺跡群周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世
●	石井遺跡群	○	○	○	○	○	○	14	大井神社東遺跡		○	○	○	○		
1	石崎遺跡	○	○			○		15	箱田うら山古墳				○			
2	本戸城跡	○	○			○	○	16	大塚古墳				○			
3	小組遺跡	○	○			○		17	土当原古墳				○			
4	西田遺跡		○		○			18	箱田宮後古墳群				○			
5	向山遺跡		○					19	古山台古墳群				○			
6	蔵後遺跡		○	○	○	○		20	土当古墳群				○			
7	薬師台遺跡		○	○	○	○		21	中野古墳群				○			
8	峯崎遺跡		○	○	○	○		22	上の平古墳群				○			
9	後久保遺跡			○		○		23	大淵窯跡群A地点					○		
10	十二所遺跡			○	○	○		24	大淵窯跡群B地点					○		
11	上坏遺跡				○	○		25	大淵窯跡群C地点					○		
12	榎畑遺跡				○			26	大淵窯跡群D地点					○		
13	大井神社遺跡		○	○	○	○		27	笠間城跡						○	

後期は薬師台遺跡・峯崎遺跡・大井神社遺跡〈13〉・大井神社東遺跡〈14〉などが挙げられる。古墳3基、古墳群9か所が当遺跡周辺に位置し、箱田うら山古墳〈15〉³⁾は全長36m、後円部25mの帆立貝式の形状を呈する前方後円墳である。ほかに大塚古墳〈16〉・土当原古墳〈17〉などがあり、古墳群は箱田地区の箱田宮後古墳群〈18〉・古山台古墳群〈19〉・土当古墳群〈20〉・中野古墳群〈21〉・上の平古墳群〈22〉などが挙げられる。これらのうち、発掘調査が行われたのは箱田宮後古墳群である。当古墳群は前方後円墳1基、円墳7基で構成され、前方後円墳と円墳2基が調査された。その結果、6世紀前半に前方後円墳が作られ、その後円墳が作られたと考えられている。古山台古墳群は、前方後円墳1基、円墳7基で構成されている。当古墳群はすでに盗掘を受けていたが、発掘調査され、前方後円墳は後円部に大規模な盗掘坑が穿たれていたため、遺物はほとんど検出されなかった。また、円墳の主体部は横穴式石室を採用しており、古墳時代後期の築造と考えられている。

律令期の遺跡は、石井地区とその周辺地域に数多く広がっている。1972年度に調査された石井台遺跡は、石井遺跡群の北西部域に位置している。調査面積は約1500㎡で該当期の住居跡29軒、掘立柱建物跡7棟が調査され、多数の墨書土器が出土したことで注目された。1984年には、遺跡群の中心部よりやや北寄りの字新地台の調査が行われ⁵⁾、該当期の住居跡3軒が確認された。その後、1998年には遺跡群中心部やや南の字竹山で試掘調査が行われ⁶⁾、出土した瓦片などから寺院跡の存在が想定されたが、2002年の発掘調査では遺構の確認には至っていない。また、当遺跡群から東へ4kmほどの佐白山北東裾部には大淵窯跡群がある。窯跡群は4支群から構成され、一支群のA地点(七耕地支群)〈23〉の窯跡が調査され⁷⁾、8世紀後半から9世紀初頭の須恵器が

多数出土している。

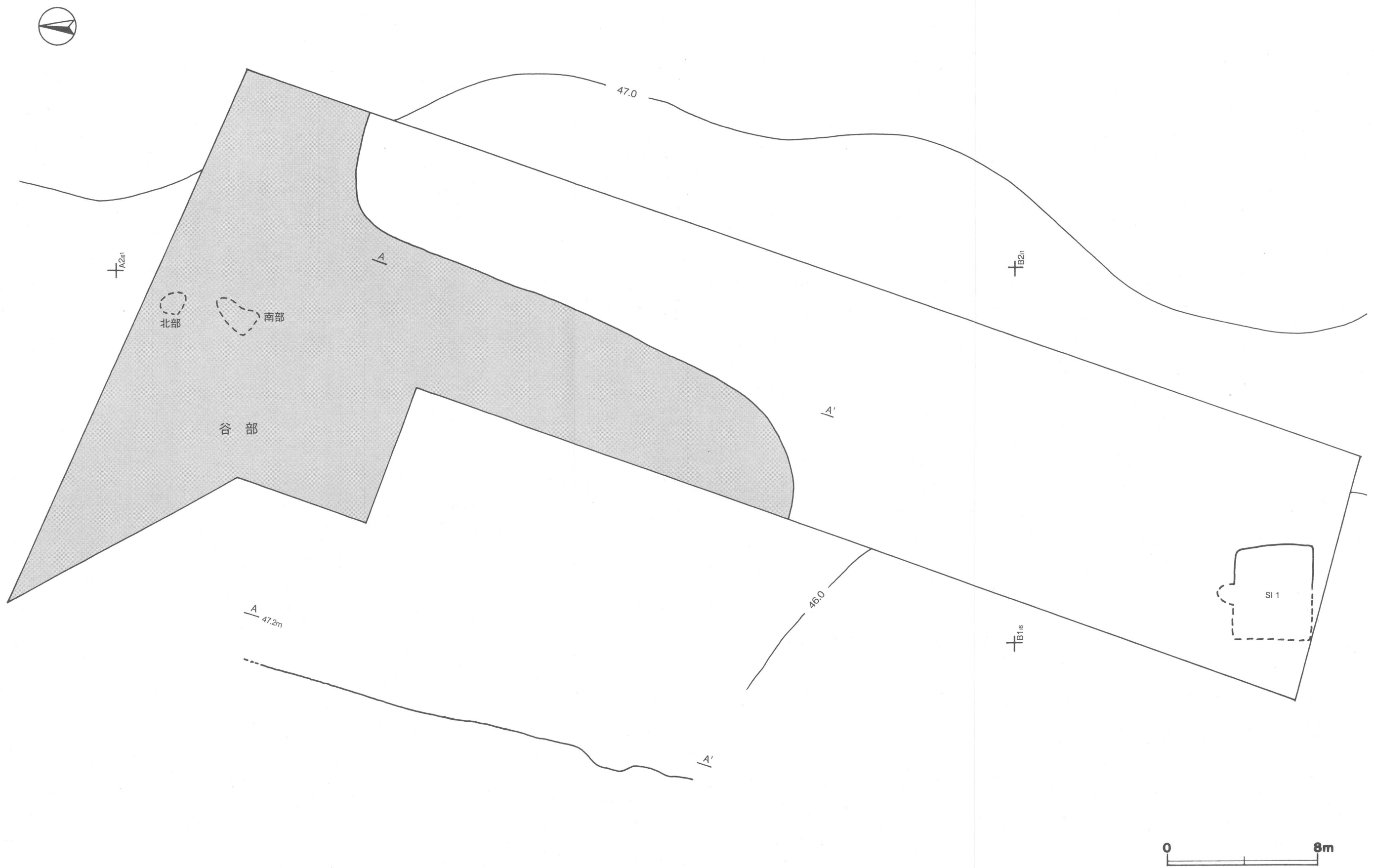
中世の笠間市域は、下野国宇都宮氏の支族である笠間氏が領していた。その後笠間氏は、豊臣秀吉の小田原攻めの際に北条側に与したため、秀吉の命を受けた宇都宮国綱に攻め滅ぼされるが、それまでに徳蔵（現七会村）、石井、市毛、大淵、福田、飯田、箱田、本戸、吉原、稲田、福原、来栖の「笠間十二ヶ郷」と呼ばれた笠間市域とほぼ同じ領域を、笠間城（27）から支配していた。また、稲田地区には、浄土真宗の開祖である親鸞が庵を構えたといわれる西念寺があり、この地の布教活動に力を注いだ。

近世の笠間藩は様々な大名が藩主として赴任してくる。また、地場産業としての陶器の生産が始まるのは安永年間であるといわれている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第2図の該当番号と同じである。

註

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 笠間市史編さん委員会『図説笠間市史』笠間市1988年10月
- 3) 大川清ほか『茨城県笠間市うら山古墳・石井台平安時代集落跡発掘調査報告書』国士舘大学文学部考古学研究室 1973年7月
- 4) 西野元ほか『笠間市史資料第5集 笠間市遺跡分布調査報告書』笠間市史編さん委員会 筑波大学歴史・人類学系考古学研究室 1992年3月
- 5) 萩原義照『茨城県笠間市石井台遺跡発掘調査報告書（笠間焼販売センターかまげん建設地）』笠間市教育委員会 1984年12月
- 6) 能島清光・萩原義照『茨城県笠間市埋蔵文化財調査報告書9集 石井遺跡群発掘調査報告書』笠間市石井遺跡群発掘調査会 2002年7月
- 7) 外山泰久『笠間大淵窯跡』笠間市史編纂委員会 1987年3月



第3図 石井遺跡群遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

石井遺跡群の今回の調査区域からは、律令期の竪穴住居跡1軒と、遺物集中地点1か所を確認することができた。遺物集中地点からは、鉄滓や手捏土器、須恵器の坏、蓋、大型の甕などが散乱した状態で出土している。

遺物は、土師器や須恵器を中心に遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に4箱出土しているが、竪穴住居跡からは、須恵器（坏・高台付坏・蓋・高盤・円面硯）などが出土している。そのほか、遺構外の遺物として土師器（坏・甕）や須恵器（坏・甕・蓋）などが出土している。

事前の試掘調査により、調査区南部の住居跡と、北部の遺物包含層が確認されていたので、調査区域に幅2mのトレンチを設定して、そのほかの遺構の確認を実施したが、遺構は確認されなかった。また、調査区域の北部には谷部が確認されたが、調査区域内では谷部の全体的な規模については把握することはできなかった。竪穴住居は調査区域南部で検出されているが、遺物集中地点は北部の谷部に確認された。

第2節 基本層序

基本層序観察用のテストピットは、調査区南端のC1b7区に掘削した。地表面の標高は46.5mで、地表面から深度1.4mまで掘削し、基本土層図は第4図に示した。

テストピットの土層は、色調・構成粒子・含有物・粘性などから5層に細分される。これらは、大きく表土・関東ローム層・鹿沼軽石層に分類され、第1層が表土（耕作土）、第2・3層が関東ローム層、そして第4・5層が鹿沼軽石層に相当し、次に各層の特徴を述べる。

第1層は、暗褐色を呈する腐植土層で、ロームブロックを少量含む。粘性・締まりはともに弱く、層厚は23～30cmである。

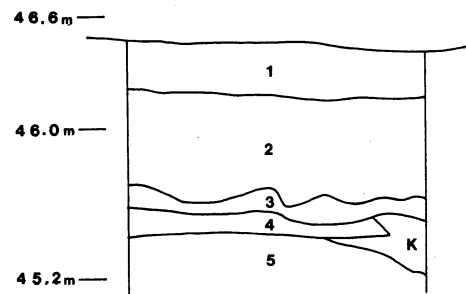
第2層は、褐色を呈するローム層で、粘性・しまりはともに普通である。層厚は50～58cmであり、ソフトロームに相当すると考えられる。なお、第1黒色帯については確認することができなかった。

第3層は、褐色を呈するローム層で、粘性は普通であるが、しまりは強い。層厚は4～14cmであり、ハードロームに相当すると考えられる。

第4層は、明褐色を呈するローム層で、鹿沼軽石を含む。粘性は弱く、しまりは普通である。層厚は8～17cmであり、鹿沼軽石層の漸移層と考えられる。

第5層は、明黄褐色を呈する鹿沼軽石層で、粘性は弱く、しまりは普通である。層厚は30cm以上有り、下層が未掘のため本来の厚さは不明である。鹿沼軽石層に相当すると考えられる。

住居跡等の遺構は、第2層上面で確認した。



第4図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 奈良時代の遺構と遺物

今回の調査では、奈良時代の竪穴住居跡1軒と遺物集中地点1か所を確認した。以下、検出した遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第5図）

位置 調査区南部のC1b6区に位置し、標高45mほどの緩斜面部に立地している。

規模と形状 長軸は5mほどで、短軸4.2mの長方形で、主軸方向はほぼ真北を指している。西壁の大部分は攪乱のため現存していないが、東壁などの壁高は14cmほどで、緩斜して立ち上がっている。

床 攪乱を受けているが、ほぼ平坦で、中央部が踏み固められており、壁溝は東部中央付近に長さ2m、幅10cm、深さ4cmほどが認められ、南壁の一部にも検出されている。

竈 北壁中央部に竈の残骸と考えられるものが確認できた。この残骸は、袖部の粘土の塊と燃焼部の焼土だけであり、竈の規模や、形状は不明で、火床部の残存部分は長軸56cm、短軸42cmほどの楕円形である。また、両袖部の外側にピットが検出され、竈に伴う施設の痕跡と考えられる。

ピット 4か所（P1～P4）。床面中央部に2か所の柱穴と、竈の袖部の外側に配置された2か所のピットが確認された。柱穴は、径が45cm前後で、深さはP3が88cm、P4が70cmである。また、竈外側の2か所のピットは、P1は径26cm、深さ40cm、P2は径20cmで、深さ18cmである。壁下には2か所以外認められないことから竈に伴うものと考えられる。

P4土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|--------|---------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 3 極暗褐色 | 炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 | | |

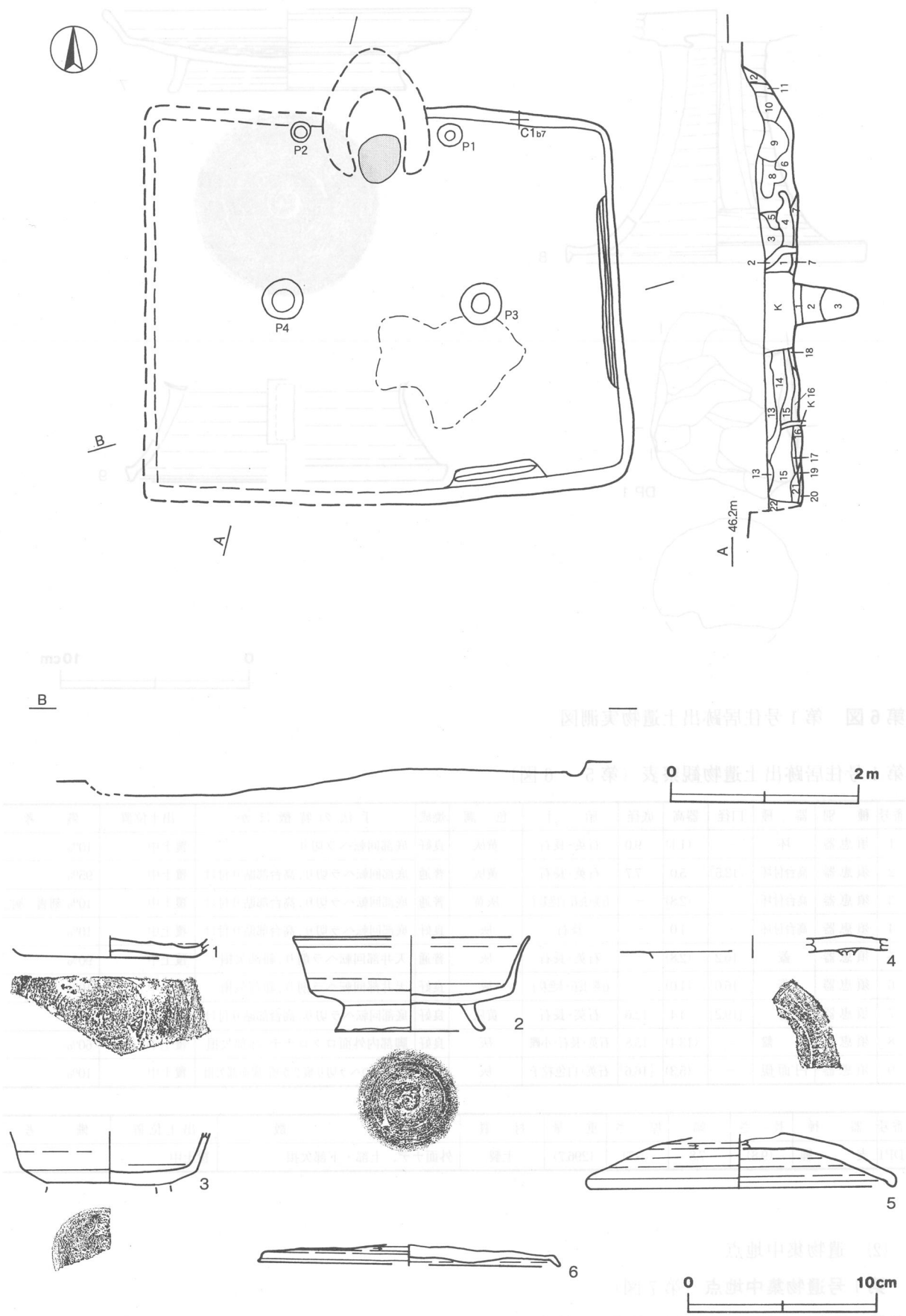
覆土 22層からなる。北部は後世の攪乱による層位の乱れが著しいが、南部と西部の堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

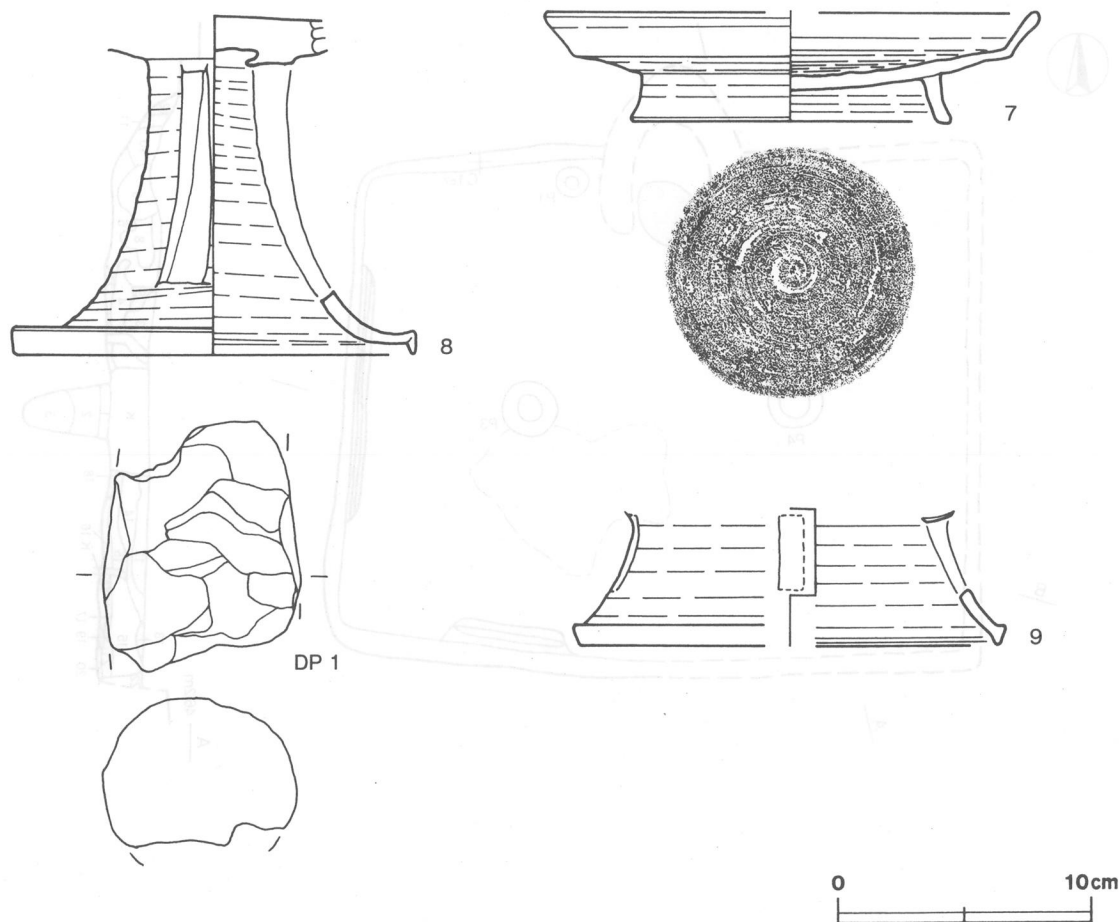
- | | | | |
|--------|----------------------------|---------|-----------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子少量、ロームブロック微量 | 11 暗褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量 |
| 2 灰褐色 | 粘土粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 黒褐色 | 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 13 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量 | 14 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量、粘性強 | 15 暗褐色 | 焼土ブロック・ローム粒子・炭化物微量 |
| 6 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、炭化粒子少量 | 16 褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 |
| 7 灰褐色 | 炭化粒子・粘土粒子少量、ロームブロック微量 | 17 暗褐色 | 炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量 |
| 8 暗褐色 | 粘土粒子少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 18 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 9 極暗褐色 | 粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 19 黒褐色 | 炭化物少量、ローム粒子微量 |
| 10 褐色 | 粘土粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 20 明褐色 | ローム粒子多量 |
| | | 21 褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | | 22 極暗褐色 | ローム粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片95点（坏6，甕89），須恵器片80点（坏11，高台付坏3，盤11，蓋30，高盤2，鉢1，甕22），礫2点が出土している。遺構の攪乱が著しいため、出土した遺物は原位置をとどめずに、細片が多く、図化できたものを掲載した。

所見 時期は出土遺物から、8世紀中葉頃と考えられる。



第5图 第1号住居跡・出土遺物実測図



第6図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表 (第5・6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	須恵器	坏	-	(1.1)	9.0	石英・長石	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り	覆土中	10%
2	須恵器	高台付坏	[12.5]	5.0	7.7	石英・長石	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り, 高台部貼り付け	覆土中	95%
3	須恵器	高台付坏	-	(2.8)	-	石英・長石・白色粒子	灰黄	普通	底部回転ヘラ切り, 高台部貼り付け	覆土中	10% 刻書「厨」
4	須恵器	高台付坏	-	1.0	-	長石	灰	良好	底部回転ヘラ切り, 高台部貼り付け	覆土中	10%
5	須恵器	蓋	16.2	(2.8)	-	石英・長石	灰	普通	天井部回転ヘラ削り, 鈕部欠損	覆土中	90%
6	須恵器	蓋	[16.0]	(1.0)	-	石英・長石・赤色粒子	灰	良好	天井部回転ヘラ削り, 鈕部欠損	覆土中	10%
7	須恵器	盤	[19.2]	4.4	12.6	石英・長石	黄灰	良好	底部回転ヘラ切り, 高台部貼り付け	覆土中	60%
8	須恵器	高盤	-	(13.4)	15.8	石英・長石・小礫	灰	良好	脚部内外面ロクロナデ, 坏部欠損	覆土中	60%
9	須恵器	円面硯	-	(5.3)	[16.6]	石英・白色粒子	灰	普通	透かしのヘラ切り痕2か所, 硯面部欠損	覆土中	10%

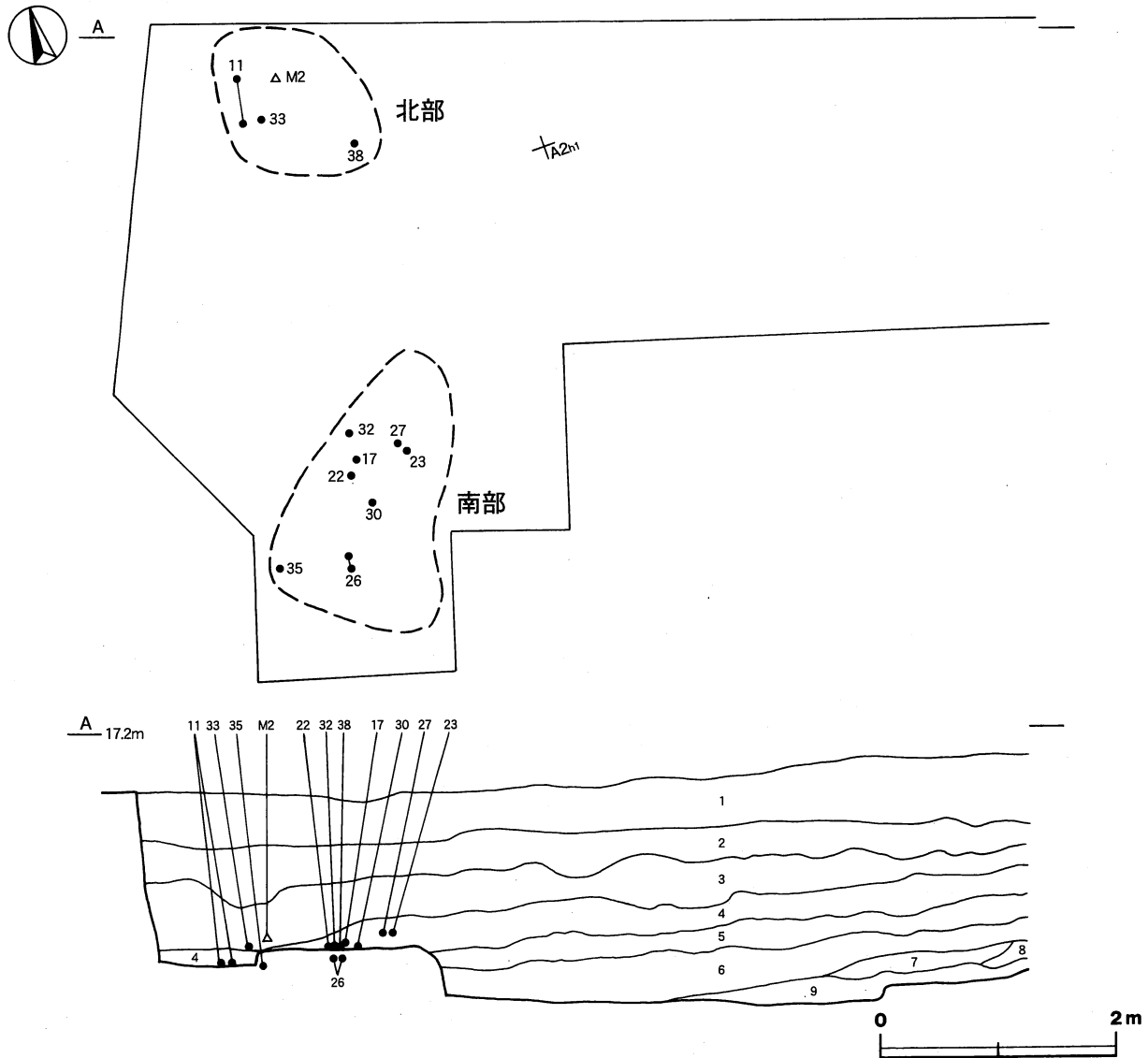
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP1	支脚	(9.8)	7.8	(5.7)	(296.7)	土製	外面ナデ, 上部・下部欠損	覆土中	

(2) 遺物集中地点

第1号遺物集中地点 (第7図)

位置 調査区北部のA1g0区に位置し, 標高45.1~45.6mほどの谷部中層に位置している。

確認状況 事前の試掘調査の際, 当地点から遺物がやや集中して検出されていたことから, トレンチ調査を



第7図 第1号遺物集中地点実測図

行ったところ、標高45mほどの位置から遺物が確認されたため、拡張して調査を実施した。その結果、2か所の遺物集中地点が確認できた。

埋没状況 当地点は表土から2mほど掘り下げた位置で、表土から9層に分層された中の4・5層であり、堆積土はローム粒子、焼土粒子、炭化粒子のほか、今市七本桜や鹿沼などの軽石層から成る自然堆積である。

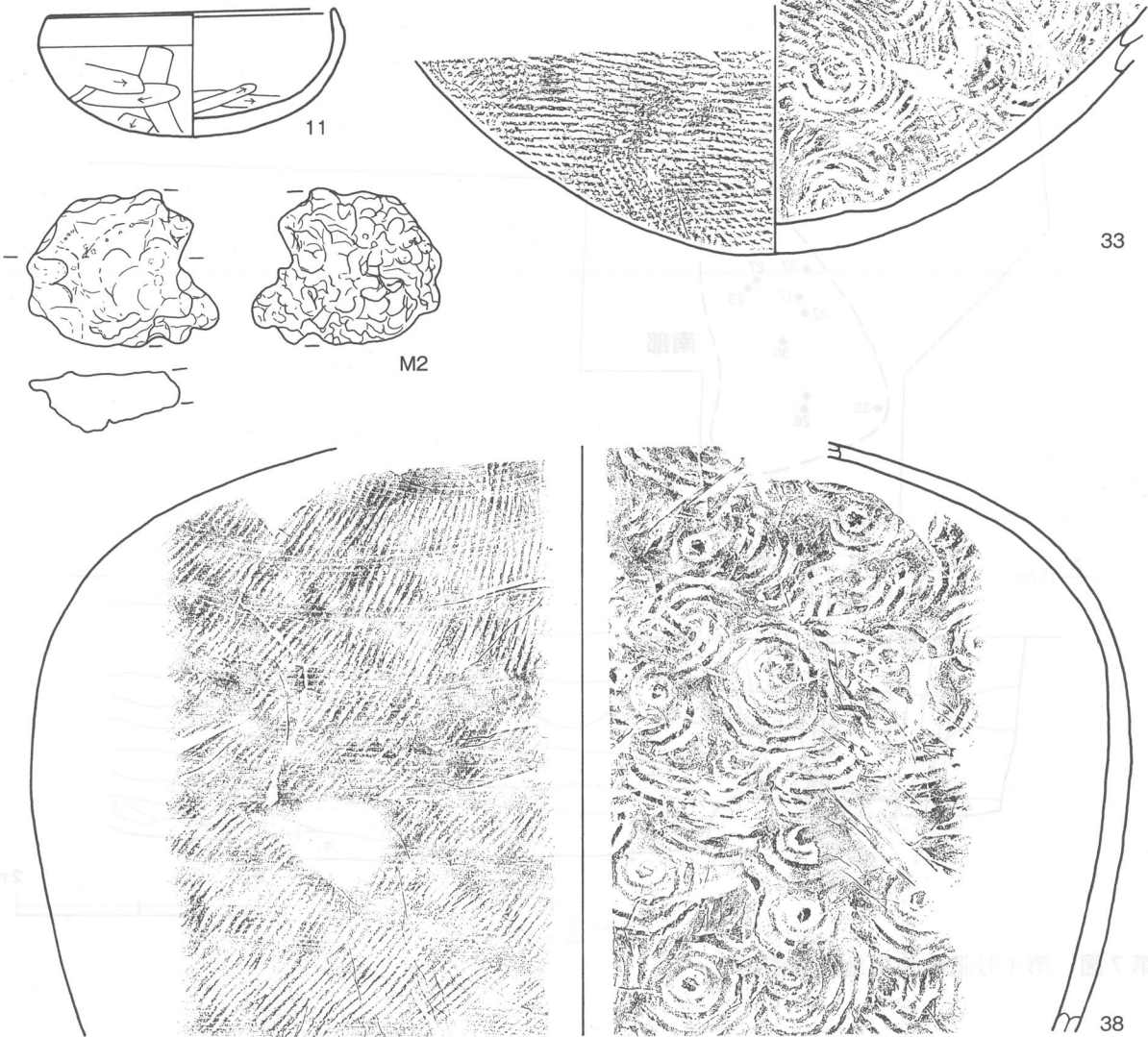
土層解説

- | | | | |
|--------|-----------------------|--------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック・炭化物微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼軽石粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量 | 7 極暗褐色 | ローム粒子微量 |
| 3 極暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量 | 8 暗褐色 | ロームブロック・今市七本桜軽石粒子少量 |
| 4 黒色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 橙色 | 今市七本桜軽石粒子中量、ロームブロック微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | | |

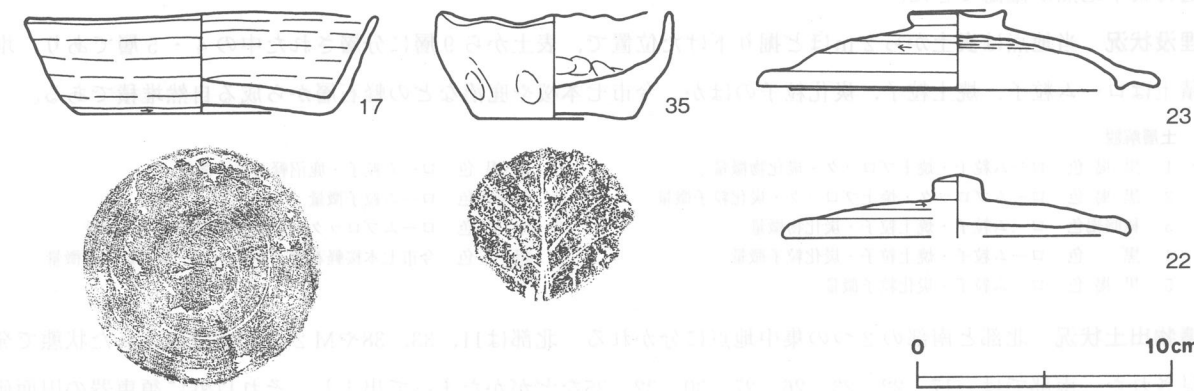
遺物出土状況 北部と南部の2つの集中地点に分かれる。北部は11, 33, 38やM2などが投棄された状態で発見された。南部では、17, 22, 23, 26, 27, 30, 32, 35などがかたまって出土し、それ以外に須恵器の円面硯などの出土が認められる。これらの遺物は谷底ではなく大部分が第4からの出土であり、谷が自然に埋まりつつある段階にこれらが投棄されたものと考えられる。

所見 出土遺物は7世紀中葉から8世紀中頃に投棄されたものと考えられるが、北部と南部の時期差を明瞭にすることはできない。また、投棄の意味や南に位置する第1号住居跡との関連も不明である。

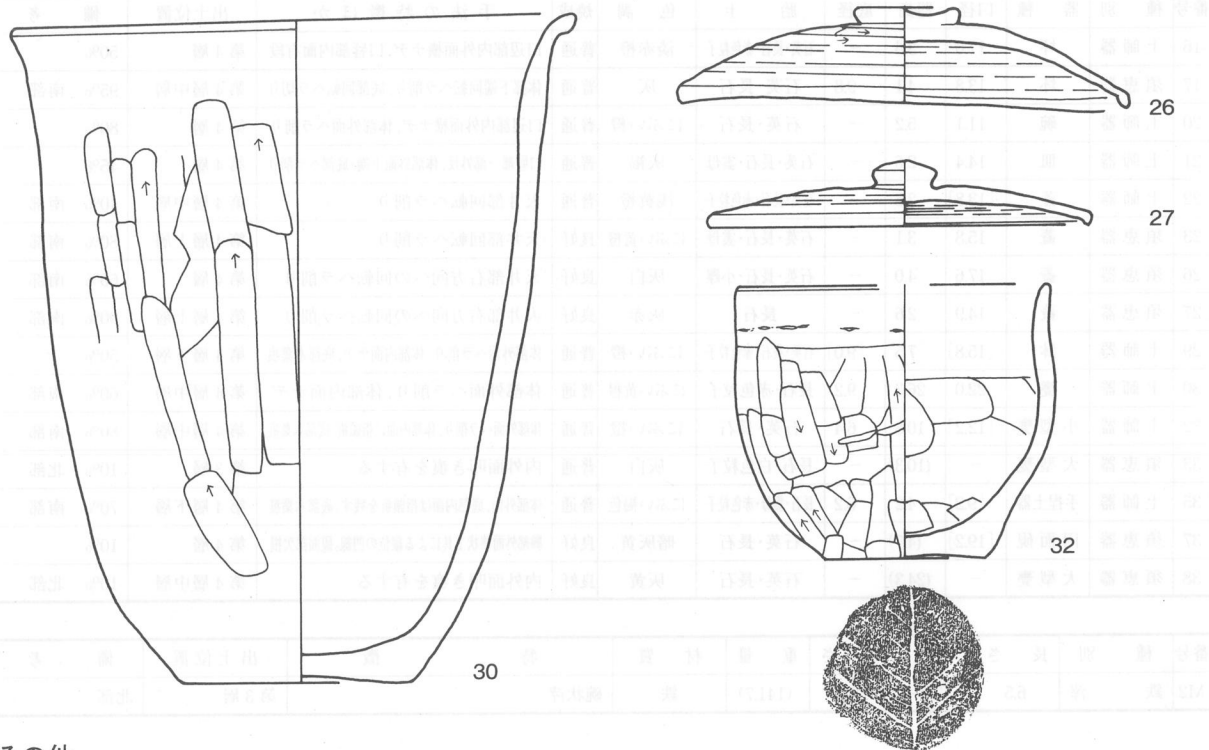
北部



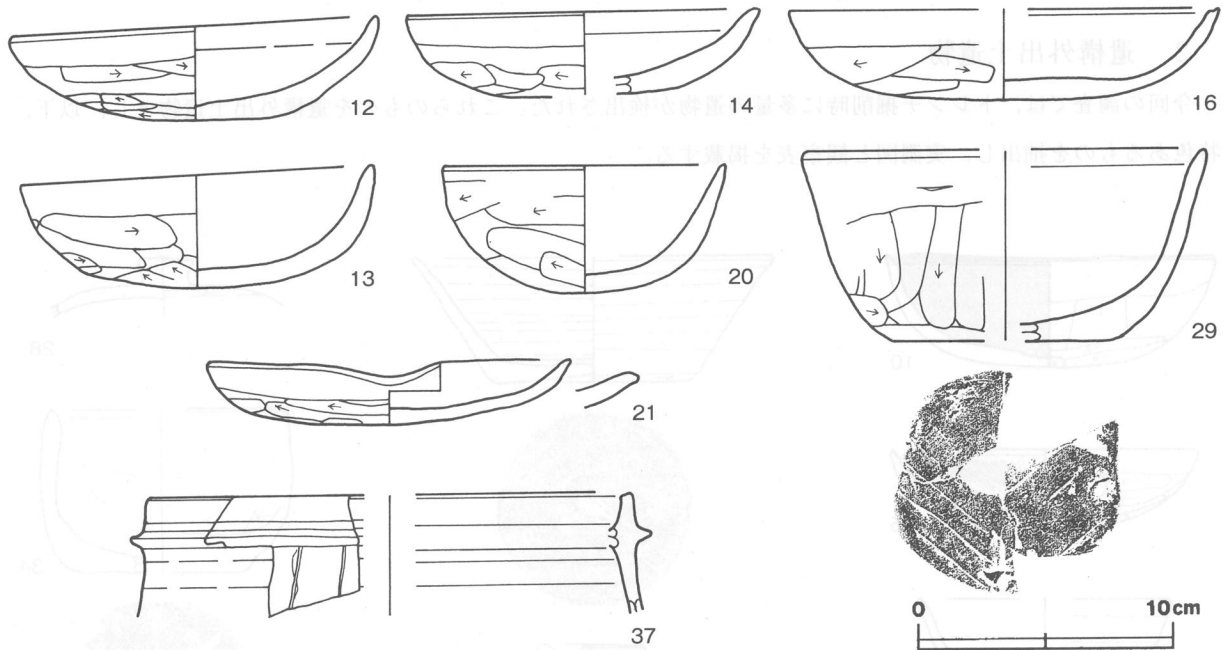
南部



第8図 第1号遺物集中地点出土遺物実測図(1)



その他



第9図 第1号遺物集中地点出土遺物実測図(2)

第1号遺物集中地点出土遺物観察表 (第8・9図)

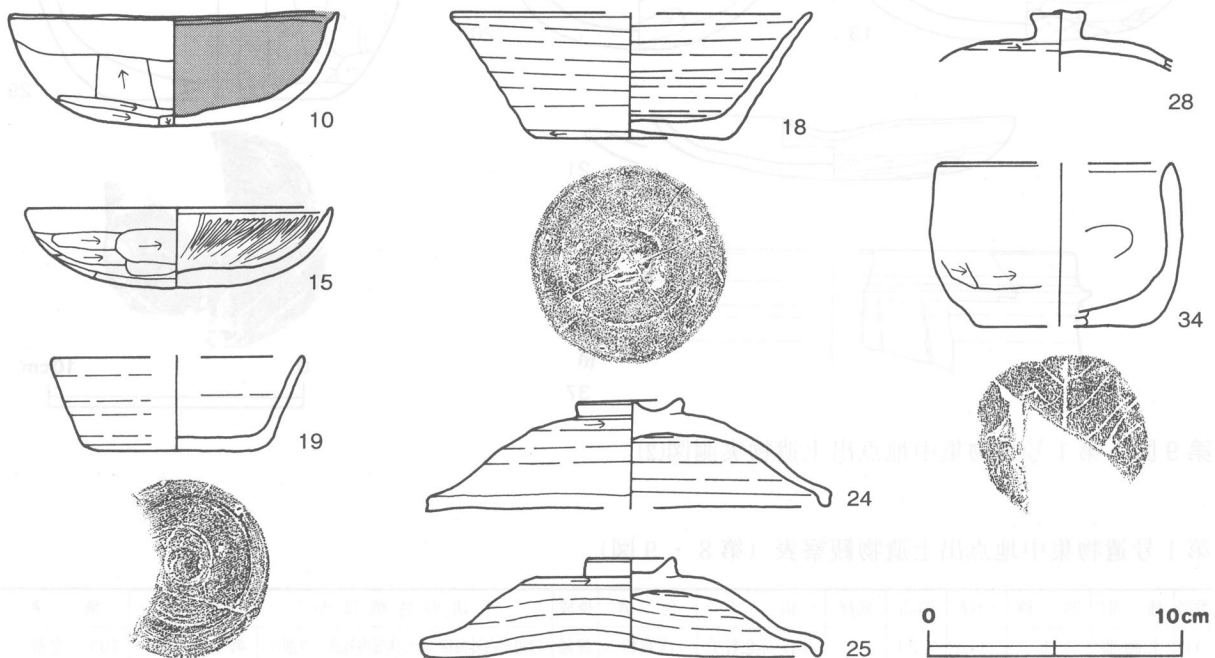
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
11	土師器	坏	11.8	5.1	-	長石・赤色粒子	浅黄橙	普通	口辺部内外面横ナデ, 体部内外面ヘラ削り	第4層下層	70% 北部
12	土師器	坏	14.4	4.1	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口辺部内外面横ナデ, 体部外面ヘラ削り	第4層	80%
13	土師器	坏	14.0	4.9	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口辺部内外面横ナデ, 体部外面ヘラ削り	第4層	80%
14	土師器	坏	14.0	3.3	-	石英・長石・赤色粒子	浅黄橙	普通	口辺部外面横ナデ, 体部下端外面ヘラ削り	第4層	80%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
16	土師器	坏	17.0	3.6	-	石英・長石・赤色粒子	淡赤橙	普通	口辺部内外面横ナデ, 口唇部内面有段	第4層	50%
17	須恵器	坏	13.8	4.1	9.8	石英・長石	灰	普通	体部下端回転ヘラ削り, 底部回転ヘラ切り	第4層中層	95% 南部
20	土師器	碗	11.1	5.2	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口辺部内外面横ナデ, 体部外面ヘラ削り	第4層	80%
21	土師器	皿	14.4	2.6	-	石英・長石・雲母	灰褐	普通	口唇部一部外反, 体部外面下端・底部ヘラ削り	第4層	45%
22	土師器	蓋	[13.8]	2.5	-	石英・長石・赤色粒子	浅黄橙	普通	天井部回転ヘラ削り	第4層中層	40% 南部
23	須恵器	蓋	15.8	3.1	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	良好	天井部回転ヘラ削り	第4層上層	80% 南部
26	須恵器	蓋	17.6	4.0	-	石英・長石・小礫	灰白	良好	天井部右方向への回転ヘラ削り	第4層	60% 南部
27	須恵器	蓋	14.9	2.6	-	長石	灰赤	良好	天井部右方向への回転ヘラ削り	第4層上層	90% 南部
29	土師器	鉢	[15.8]	7.5	[9.0]	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 体部内面ナデ, 底部木葉痕	第4層下層	50%
30	土師器	甕	22.0	26.3	9.2	長石・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	体部外面ヘラ削り, 体部内面ナデ	第4層中層	60% 南部
32	土師器	小型甕	[12.2]	10.8	6.4	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り, 体部内面に指頭痕, 底部木葉痕	第4層中層	80% 南部
33	須恵器	大型甕	-	(10.3)	-	長石・白色粒子	灰白	普通	内外面叩き痕を有する	第3層	10% 北部
35	土師器	手握土器	[9.2]	4.2	6.2	長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐色	普通	体部外面, 底部内面は指頭痕を残す。底部木葉痕	第4層下層	70% 南部
37	須恵器	円面硯	[19.2]	(4.7)	-	石英・長石	暗灰黄	良好	脚部外面棒状工具による縦位の凹線。硯面部欠損	第4層	10%
38	須恵器	大型甕	-	(24.3)	-	石英・長石	灰黄	良好	内外面叩き痕を有する	第4層中層	10% 北部

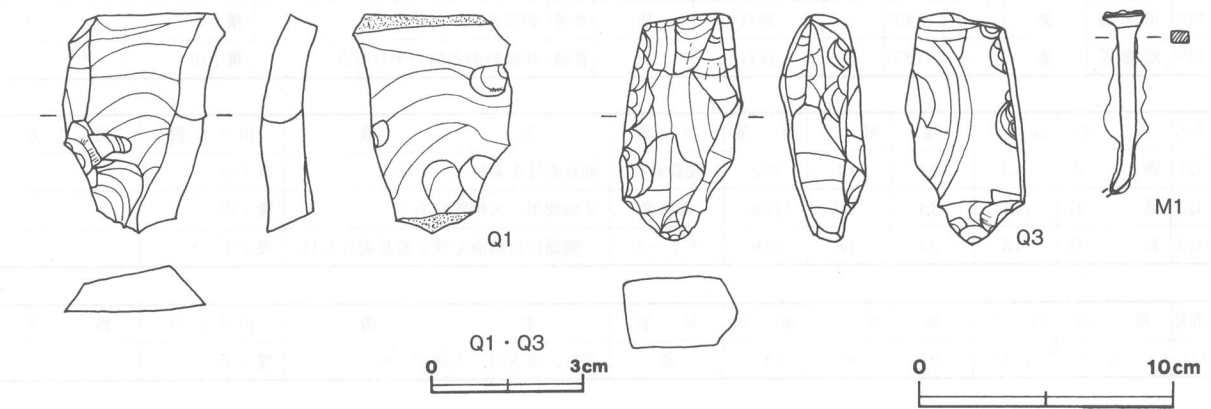
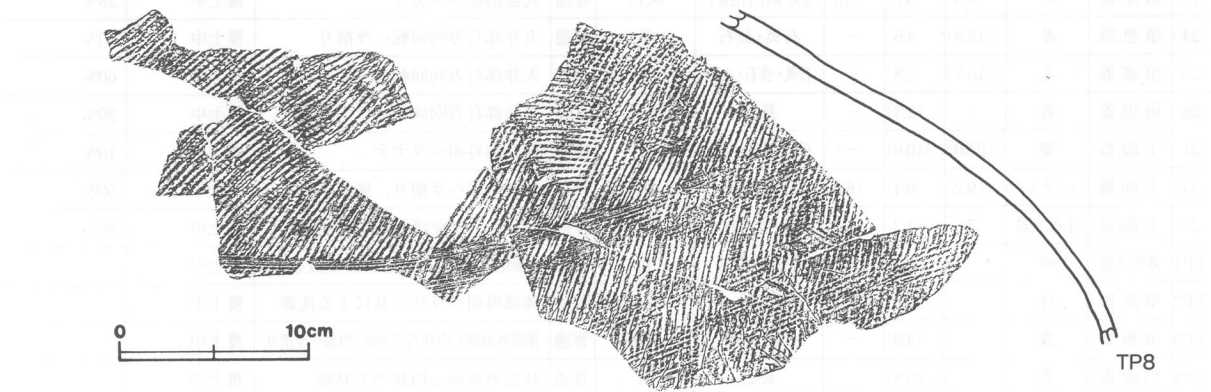
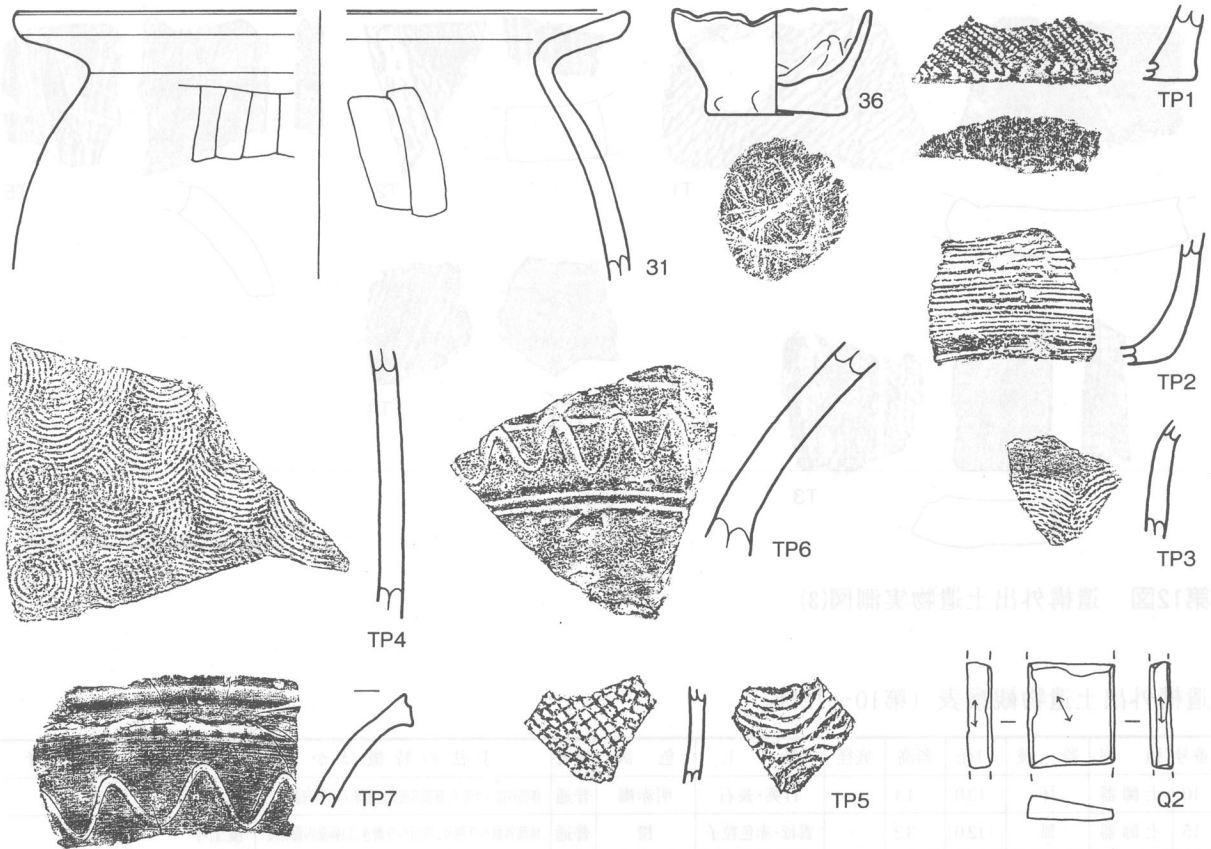
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考	
M2	鉄	滓	6.5	(7.8)	2.5	(141.7)	鉄	碗状滓	第3層	北部

2 遺構外出土遺物

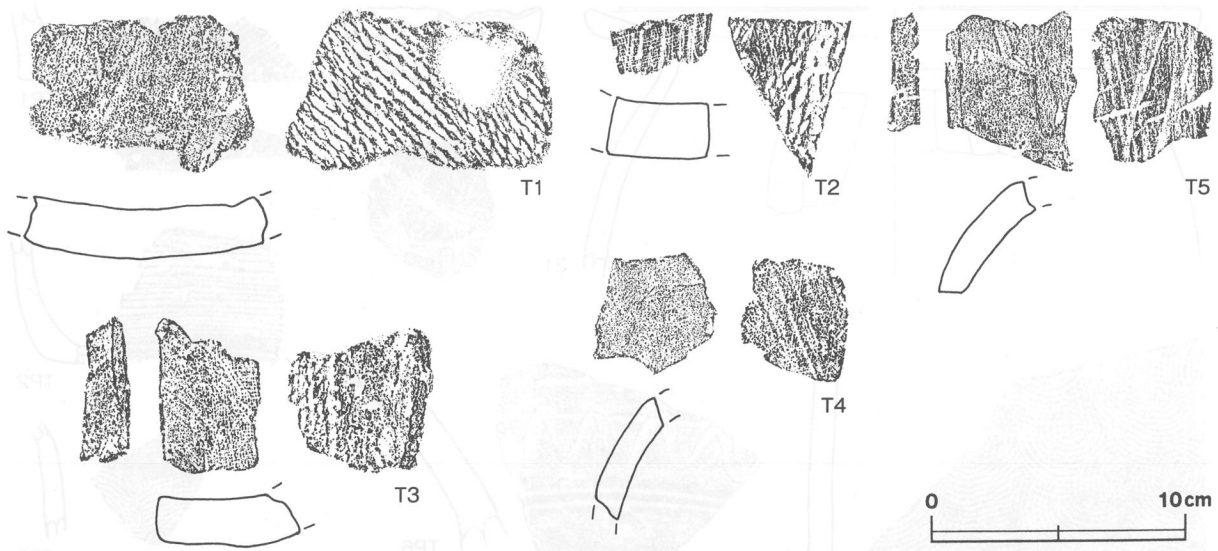
今回の調査では、トレンチ掘削時に多量の遺物が検出された。これらのものを遺構外出土遺物とし、以下、特色あるものを抽出し、実測図と観察表を掲載する。



第10図 遺構外出土遺物実測図(1)



第11図 遺構外出土遺物実測図(2)



第12図 遺構外出土遺物実測図(3)

遺構外出土遺物観察表 (第10~12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
10	土師器	坏	13.0	4.4	-	石英・長石	明赤褐	普通	体部外面へら削り, 体部内面黒色処理, 口唇部内面有段	覆土下層	70%
15	土師器	皿	[12.0]	3.2	-	雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面へら削り, 内面へら磨き, 口唇部内面有段	覆土中	50%
18	須恵器	坏	[14.2]	5.0	7.8	石英・長石	灰白	良好	体部下端へら削り, 底部回転へら切り後, 一方向にナデ	覆土中	80%へら記号「×」
19	須恵器	坏	[9.9]	3.7	6.3	石英・長石・白色粒子	灰白	普通	底部回転へら切り	覆土中	35%
24	須恵器	蓋	[15.9]	4.6	-	石英・長石	灰	普通	天井部右方向回転へら削り	覆土中	70%
25	須恵器	蓋	[15.5]	3.8	-	石英・長石・小礫	明ナリーブ灰	普通	天井部右方向回転へら削り	覆土中	60%
28	須恵器	蓋	-	(2.3)	-	長石	褐灰	良好	天井部右方向回転へら削り	覆土中	20%
31	土師器	甕	[24.0]	(10.6)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	体部内外面へらナデ	覆土中	10%
34	土師器	ミニチュア	[9.2]	6.4	[6.6]	石英・長石	にぶい橙	普通	体部外面へら削り, 底部木葉痕	覆土中	50%
36	土師器	手捏土器	[7.6]	4.2	5.5	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面, 底部内面は指頭痕を残し, 調整を加えず	覆土中	80%
TP1	弥生土器	壺	-	3.0	-	長石・雲母	橙	普通	体部外面附加状1種(附加2条)の縄文を施文	覆土中	
TP2	須恵器	坏	-	(5.2)	-	長石	灰	普通	体部外面へら状工具による沈線	覆土中	
TP3	須恵器	甕	-	(4.9)	-	長石・雲母	褐灰	普通	体部外面同心円状当て具痕, 内面へら削り	覆土中	
TP4	須恵器	甕	-	(10.8)	-	長石	灰	普通	体部外面同心円状当て具痕	覆土中	
TP5	須恵器	甕	-	(3.9)	-	長石	灰	普通	体部外面格子叩き, 内面同心円状当て具痕	覆土中	
TP6	須恵器	甕	-	(8.5)	-	長石	浅黄	普通	頸部外面横位沈線と波状文	覆土中	
TP7	須恵器	甕	-	(4.7)	-	長石	灰	普通	頸部外面に波状文	覆土中	
TP8	須恵器	甕	-	(19.7)	-	長石	灰	普通	体部外面斜位の平行叩き	覆土中	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q1	剥片	4.3	3.2	1.1	13.2	硬質頁岩	縦長剥片を素材としている	覆土中	
Q2	砥石	(4.1)	3.4	1.0	(17.8)	凝灰岩	3面使用, 欠損部分あり	覆土中	
Q3	石核	4.5	2.4	1.8	22.9	チャート	一側面に自然面を残す縦長剥片石核	覆土中	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M1	釘	(7.1)	0.7	0.5	(15.3)	鉄	和釘, 頭巻釘, 先端部欠損	覆土中	

番号	種別	幅	長さ	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
T1	平瓦	(9.5)	(6.5)	2.0	(173.7)	長石	黒褐	普通	凸面太縄叩き, 凹面布目痕	覆土下層	
T2	平瓦	(4.0)	(6.1)	2.2	(60.3)	長石	明赤褐	普通	凸面太縄叩き, 凹面布目痕	覆土中	
T3	平瓦	(5.5)	(6.4)	1.9	(70.0)	長石	赤灰	普通	凸面太縄叩き, 凹面布目痕, 凹凸面側部ヘラ削り	覆土中	
T4	丸瓦	(5.0)	(5.2)	1.2	(40.8)	長石	橙	普通	凸面ヘラ削り, 凹面布目痕	覆土中	
T5	丸瓦	(5.4)	(6.5)	1.3	(63.1)	長石	明赤褐	普通	凸面ヘラ削り, 凹面布目痕, 凹凸面側部ヘラ削り	覆土中	

第4節 まとめ

石井遺跡群の今回の調査は、平成14年9月1日から9月30日までの1か月間で実施され、竪穴住居跡1軒、遺物集中地点1か所が調査され、奈良時代の遺構であることが判明した。今回の調査だけでは当遺跡群の全貌を把握することはできないが、確認できたいくつかの事柄を述べ、ここでまとめとする。

1 今回の調査区域について

今回の調査では、遺構として奈良時代のものしか確認できなかったが、奈良時代以外の遺物も確認することができた。

旧石器時代においては、石器などの発見には至らず、石核と剥片がそれぞれ1点ずつ採集されただけである。また、縄文時代の遺構・遺物は全く認められなかった。

弥生時代の遺物は、遺構外から壺底部が出土している。今回の調査区域に隣接した笠間市石井遺跡群発掘調査会（2002年度）による調査区域からは、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての壺形土器が出土している。そのほか当遺跡群の各所から当該期の遺物が発見されており、規模は不明であるが、今回の調査区域付近に集落が分布していたと考えられる。

古墳時代では遺物集中地点から後期の土師器が少量発見されているだけである。

奈良時代が今回確認された遺構の主体であり、石井遺跡群の中心となる時期である。今回調査された第1号住居跡は攪乱が著しく、遺物の原位置を明確にすることはできなかったが、出土土器の形状などから時期は8世紀中葉と考えられた。遺物は須恵器高台付坏の底部に「厨」と焼成前に刻書されたものと円面硯の破片が出土しており、官衙的な遺跡の性格が連想される。ほかに鉄滓も認められ、周辺に鍛冶関連作業を行っていた工房の存在もうかがわせる。第1号遺物集中地点では7世紀中葉から8世紀中頃の遺物が出土して、北部と南部での時期差は明確ではなく、この投棄された土器群の性格については判然としない。

平安時代以降、当調査区域内で人間が活動した痕跡は、遺構・遺物から見た場合明確ではない。

2 石井遺跡群

遺跡群全体の範囲内でとらえた場合、今回の調査区域は南端部に位置する。これまでの当遺跡群内では3回調査が行われており、律令期の遺構・遺物が中心の遺跡であることが判明しており、当調査区域も同時代のものである。ここでは過去の調査成果を概観しながら周囲に広がる石井遺跡群の中における当調査区域の位置付けをしてみたい。

1972年に国士館大学考古学研究室によって字新地台の調査が行われ、住居跡29軒、掘立柱建物跡7棟、土坑1基が確認された。住居跡の変遷は8世紀中頃から10世紀後半までの6時期に分けている。また、掘立柱建物跡の時期は明確にされていないが、住居跡より後出と考えられている。1984年の笠間市教育委員会による字新

地台の調査では、平安時代の住居跡3軒が発見されている。また、2002年の笠間市石井遺跡群発掘調査会による字竹山、字土器内の調査では、当該期の遺構は確認されていない。以上のことから、当遺跡群の中心の時代は律令期であり、8世紀中頃に集落が形成されはじめ、10世紀後半まで継続して集落が営まれたと考えられる。この状況を当調査区域と照らし合わせてみると、第1号住居跡は当遺跡群の中でも集落が形成されはじめた段階の住居跡と考えられる。また、この集落というのは、風土記のいうところの「笠間村」であるが、この名称は俗称であり、本来一帯は巡廻・井田・巨神の三郷から成る。当遺跡群は新治郡巡廻郷の一部に比定されており、遺跡群内に官衙的施設を内包していることは十分に考えられる。また、瓦や土器の焼成不良品、鉄滓の出土から各種工房・窯跡の存在、瓦を使うような寺院などの建物の存在などを想定することは可能であろう。

参考文献

- ・大川清『茨城県笠間市うら山古墳・石井台平安時代集落跡発掘調査報告書』国士舘大学文学部考古学研究室 1973年7月
- ・能島清光・萩原義照「石井遺跡群発掘調査報告書」『茨城県笠間市埋蔵文化財調査報告書9集』笠間市石井遺跡群発掘調査会 2002年7月
- ・萩原義照『茨城県笠間市石井台遺跡発掘調査報告書（笠間焼販売センターかまげん建設地）』笠間市教育委員会 1984年12月
- ・川井正一『日本考古学協会1995年度茨城大会シンポジウム3 地方官衙とその周辺』日本考古学協会茨城大会実行委員会 1995年11月
- ・笠間市史編さん委員会『笠間市史 上巻』笠間市 1993年
- ・中山信名『新編常陸国誌』崙書房 復刻版 1979年12月

写 真 图 版



調査区全景
(南から)



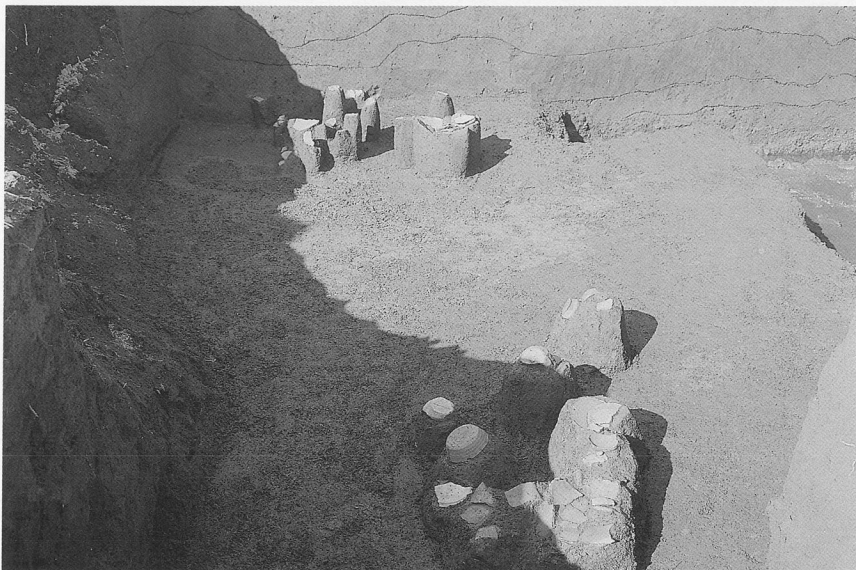
第1号住居跡完掘状況



第1号遺物集中
地点（北部）



第1号遺物集中
地点（南部）



第1号遺物集中
地点（南から）



第1号遺物集中地点-23



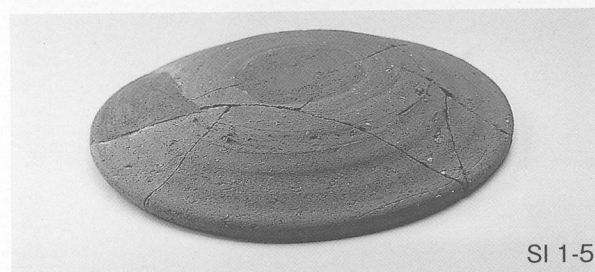
遺構外-24



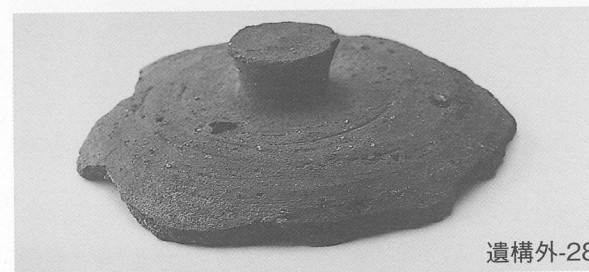
遺構外-25



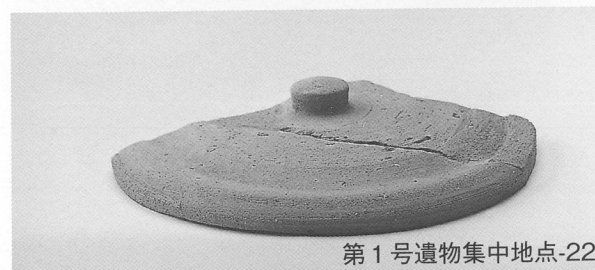
第1号遺物集中地点-26



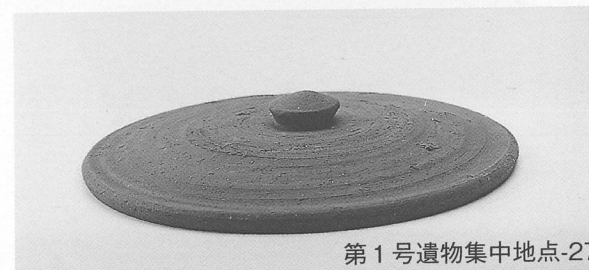
SI 1-5



遺構外-28



第1号遺物集中地点-22



第1号遺物集中地点-27



第1号遺物集中地点-13



第1号遺物集中地点-12



第1号遺物集中地点-11



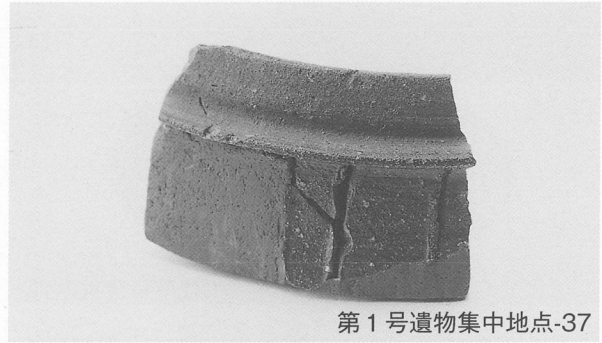
遺構外-10

第1号住居跡，第1号遺物集中地点，遺構外出土遺物

PL 4



遺構外-18



第1号遺物集中地点-37



SI 1-3



SI 1-2



SI 1-7



SI 1-8



第1号遺物集中地点-32

第1号住居跡, 第1号遺物集中地点, 遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第219集

石井遺跡群

平成16（2004）年3月24日印刷

平成16（2004）年3月26日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 ワタヒキ印刷株式会社
〒310-0012 水戸市城東1-5-21
TEL 029-221-4381